（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　塚田穂高

塚田穂高氏の「戦後日本宗教の国家意識と政治活動に関する宗教社会学的研究――新宗教運動のナショナリズムを中心に」は、第二次世界大戦後の日本の新宗教のナショナリズムにつき、詳細な資料調査を踏まえて論じた実証的な業績である。第1章では、宗教教団が政党を結成して選挙に候補を立てて運動をする「政治進出」を素材に、宗教的ナショナリズムを論じる方法論的な意義が論じられている。宗教的ナショナリズムを「正統」と「異端」に、さらに「異端」を正統に近い「O異端」と正統に遠い「H異端」に分ける類別は安丸良夫の『近代天皇像の形成』を踏まえたものだ。塚田氏は「正統」を日本の伝統文化と天皇崇敬を尊ぶ「国家神道」と捉え、ナショナリズムを分析する指標として、①文化・伝統観、②天皇観、③対人類観、④経済的優位観、⑤戦前・大戦観、⑥欧米・宗教観の6項目を設定する。

第Ⅰ部第2章では「正統」的宗教ナショナリズムを唱えてきた宗教教団が取り上げられる。「敬神尊皇」を掲げる神社本庁に典型が見られるもので、塚田氏はこれを「保守合同運動」に沿ったものとする。主軸は1970年代以降、「日本を守る会」「日本を守る国民会議」などの形で展開し、97年以降は「日本会議」に統合される。日本会議には神社神道とともに、解脱会、念法眞教など新宗教の数教団が加わっている。また、第3章では国家神道とは異なる神話を掲げるという点では異端的だが、日本の文化伝統と天皇崇敬を重んじるという点で正統に近い「O異端」の真光の宗教的ナショナリズムの特徴が分析されている。

第Ⅱ部の諸章で論じられる「政治進出」の代表例は創価学会だ。創価学会は日蓮仏法に基づき「王仏冥合」を掲げて政治活動に乗り出したもので、宗教的ナショナリズムに基づく「政治進出」が成功した例だ。オウム真理教と幸福の科学は「H異端」的なユートピア的ビジョンを掲げて「政治進出」したが、議席を得ることができなかった。さらに浄霊医術普及会（世界浄霊会）、和豊帯の会（アイスター、女性党）のような政治活動としての現実性が疑われる例もある。塚田氏はこれらの例をつぶさに検討して、「政治進出」の動機と背後にある宗教的ナショナリズムを分析する。創価学会、オウム真理教、幸福の科学は強い政治的主張をもっており、そこに宗教的ナショナリズムが見られるが、それは「正統」派のそれとはだいぶ異なっている。これらの教団はいずれも普遍主義的な教義を掲げ、ナショナリズムを抑制する要素もあり、日本文化や天皇崇敬に力点は置かれておらず、「H異端」に類別できるとする。

「政治進出」に焦点を合わせることで凝縮された分析が可能になった反面、ナショナリズムの多様な表出の中で「政治進出」がどのような位置を占めるのかが明確でないこと、分析の枠組みとなる諸概念の検討が十分ではないことなどの弱点はあるが、戦後の新宗教の宗教的ナショナリズムと「政治進出」について、詳細な資料調査を踏まえた本格的研究として大きな成果をあげている。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。